

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年5月22日現在

機関番号：17701
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2011～2012
 課題番号：23730839
 研究課題名(和文) 音楽表現力を育むための総合的アプローチに関する実践的研究 スイスの教育からの示唆
 研究課題名(英文) A Practical Study of a Comprehensive Approach to the Development of Children's Musical Expression: A Suggestion from Music Education of Switzerland
 研究代表者
 今 由佳里 (KON YUKARI)
 鹿児島大学・教育学部・准教授
 研究者番号：40440838

研究成果の概要(和文)：本研究は、スイスの6つの公立小学校において50時間を超える音楽およびリトミック授業の観察、スイスの公立小学校へ通う児童185名から得られたアンケート結果を基に考察している。他分野の芸術活動を取り入れた総合的アプローチによる音楽表現学習について、先駆的に行われているスイス・フランス語圏の音楽授業を観察することによって、その効果と日本の音楽教育適用への可能性を探った。

研究成果の概要(英文)：This study is based on the observation of classes of music and eurhythmics of over 50 hours in six public elementary schools and also on the results of questionnaire to 185 children enrolled in a public elementary school in Geneva. Concerning the musical expression through a comprehensive approach that includes other fields of fine arts such as poems, physical movements, pantomimes, graphic designs and sound effects, I investigated the educational effects of pioneering music classes in the sphere of Swiss French language and searched the possibility of its application to music education in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	600,000	180,000	780,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：音楽教育，スイス，表現，総合的アプローチ，音楽アイデンティティー，小学校

1. 研究開始当初の背景

近年、海外の音楽教育動向についての研究や資料は多くなってきている。しかしながらスイス・フランス語圏の学校音楽教育に関する研究は日本では未だ少ない。

この地の子どもたちの音楽授業を観察すると、表現する前に、自分のイメージを十分に膨らませる活動が見られる。イメージ力の拡大が表現力の育成に寄与しているものと思われる。学校音楽教育においては、単に「歌をうたう」或いは「楽器を演奏する」というものだけではなく、「リズムとモチーフを身体表現によって再現する」や「音楽を伴ったパントマイム」、「視覚映像記録の音響効果の

想像」等、様々な角度から音楽表現にアプローチしているのである。ジュネーヴ州の『習得目標』に注目すると、描写・図画やダンス、振り付け、言語表現、ロールプレイングに関する記述が多数見られる。つまり、多面的で総合的なアプローチ方法をとることによって、子どもたちの音楽表現力を拡大しようとする試みがなされているのである。このように様々な感性を刺激する音楽学習が、子どもたちの音楽表現能力拡大に役立っているものと推察される。さらに、スイス・フランス語圏の子どもたちの活動を観察すると、音楽表現活動に対する主体性と創造性の豊かさに気づかされる。その背景には、スイス・フ

ランス語圏の教育が総合的なアプローチの中で、子どもたち自身の意見や嗜好を意識させ、それを明確に表明することを中心に行われてきたことが挙げられる。つまり、子どもたちの音楽アイデンティティを徐々に形成しているのである。このことは、ジュネーヴ州の学習指導要領にあたる『習得目標』に明記されており、州の方針として推進されていることがわかる。子どもたちが自身の意見・感覚・嗜好を形成、認識することで、意識して自己を主張したり表現したりすることが容易になっているのである。また、このことが子どもたちの音楽表現の幅を広げることにつながっているものと考えられる。以上のような研究背景から、本研究を着手する契機となった。

2. 研究の目的

本研究は、総合的なアプローチによる音楽学習が展開されているスイス・フランス語圏の小学校における実践的な調査を通して、子どもの音楽表現力育成についていかなる効果があるかを検証し、日本の音楽表現学習に関して新しい方向性を拓くことを目的とするものである。

3. 研究の方法

研究の方法は、スイス・フランス語圏の小学校で行われている総合的なアプローチによる音楽表現学習の授業を観察し、授業分析を通して効果を検証、音楽表現力育成に関する実践的研究を行うものである。さらに、前記した研究成果を基に日本の小学校における適用について、その可能性を探る。

具体的には、①スイスの公立小学校において音楽およびリトミック授業の観察と内容分析、②スイスの公立小学校へ通う児童へのアンケート実施、③教師用指導書の分析、④日本の小学校における適用の可能性に関する検証、である。

4. 研究成果

本研究の成果として、上記3「研究の方法」で提示した4つの視点に沿って報告する。

①スイスの公立小学校において音楽およびリトミック授業の観察と内容分析

スイスの学校音楽教育に関する実態を把握するため、ジュネーヴ州の6つの公立小学校、エコール・ドゥ・マイユ、ユーゴー・ドゥ・セングー、ホズリー、ゲーゼンドルフ・セントラル、サン・ジャン、シャルミーユにおいて50時間を超える音楽・リトミック授業の観察を行った。スイス・フランス語圏の州都であるジュネーヴは、リトミック教育を行ったジャック・ダルクローズ (Émile Jaques-Dalcroze, 1865- 1950) が教鞭をと

った地である。今日世界で広く親しまれているリトミック教育の創始者であるダルクローズは、ジュネーヴで独自の教育メソッドを確立させた。彼の音楽教育思想は、プライベートな音楽教育機関のみならずジュネーヴ州の学校音楽教育にも大きな影響を与えており、音楽科の授業ではリトミックが教育の主要な内容として含まれていることがわかった。ジュネーヴ州の多くの小学校では4年生まではリトミックを主流とした音楽科授業を展開しており、身体の動きを取り入れた音楽教育を積極的に公立学校において実践している。音楽専科教員と同様にリトミック専科教員が常勤し、州の公教育課には「音楽・リトミック科」というセクションが置かれていることから、ジュネーヴ州におけるリトミック教育の普遍性が理解できる。実際に研究代表者がジュネーヴで観察した授業においても、全ての授業において必ず身体の動きを伴った活動が導入されていた。

ジュネーヴ州では、低学年の音楽授業は特にリトミックを中心に行われていることは既に前述している。歌唱・器楽・鑑賞という領域は分化されて教育されるのではなく、リトミックとともにそれぞれの学習が行われているのである。すなわち、歌を歌いながら身体を動かす、歩きながらタンバリンを鳴らす、鑑賞した音楽にコレグラフィするなどの活動が授業中頻繁に行われているのである。

ジュネーヴ州で行われているような身体の動きを取り入れた音楽学習は、子どもたちにとってどのような効果を期待しているかという問いについて、エコール・ドゥ・マイユのリトミック専科教員グランジョアン氏は、小学校の音楽授業に対する自身の考えを「リトミックを取り入れることは、音楽に関して子どもたち自身の可能性をひらくことに繋がる。また、音楽を自分の身体をつかって掴み取ることができるのである。身体の動きを取り入れることによって、子どもたちの音楽的感覚は効果的に発達させることができる。また同時に、動きの具体的な作用を知ることできる。音楽を聴いて自分に起こったことを、身体の動きを通して再認識することもできる。それを創造して、表現して、自分が考えたことを外に出していく。理解して自身に取り入れたことを外に出す『表現する』ことが重要なのである(拙訳)」と答えを返している。

音楽は目に見えない抽象的なものである。したがって、時に音楽以外の媒体を通して聴きとったことを再表現する機会を持つことは、子どもたちの音楽理解を効果的に推し進めることととらえ、総合的なアプローチによる音楽学習を推進しているという仮説が立てられる。音楽の要素を自分の身体を用いて習

得し、表現する活動は、感覚器官の未分化な低学年の子どもたちの理解を促し音楽的成長に有効に作用するものと考えられる。また、子どもたちの想像力を膨らませて創造性を養うことにも繋がっていることが分析できた。

②スイスの公立小学校へ通う児童へのアンケート実施

スイスの公立小学校へ通う児童 185 名に、音楽の授業に関する質問紙調査を実施した。アンケートからジュネーヴ州では身体を用いた音楽学習、一方フランス語圏第2の都市があるヴォー州は絵画やイラスト、グラフィックなどの視覚芸術を多用した音楽学習が行われているということが指摘できた。総合的アプローチによる音楽学習という方向性は共通しているものの、州によって異なった性格のアプローチがなされていることが明らかとなった。

ジュネーヴでは身体の動きを伴ったリトミックを学校教育へ導入する目的のひとつとして、コミュニケーション能力の伸長が挙げられている。アンケートでは、教師の問いかけやクラスメイトとの関わり方に関する項目を設定した。そこでは「友達のまねをして体を動かす」「先生は、授業中皆さん一人ひとりの名前をよく呼びますか」という問いに、多くの児童が肯定的な回答を行っていた。なおアンケートには、リトミックの授業内容として「タンバリンを使って友達のまねをした」「膝でリズムを打つ」「先生の鳴らす太鼓のニュアンスにあわせて、歩みのバリエーションを変えながらリズムを感じる」など様々な音楽活動についても記されていた。

③教師用指導書の分析

スイス・フランス語圏で伝統的に使用されている小学校教師用音楽指導ガイドから、**PERCEPTION-CREATION-EXPRESSION**に焦点をあて、その教材内容を分析した。ここには9つの教材具体例が取り上げられているが、それら全てに音楽以外の芸術素材が用いられており、総合的視点からの音楽学習がなされていることが指摘できる。例えば絵画や写真、詩、グラフィック、身体の動き、言葉等を利用した活動である。他分野の芸術活動からアプローチすることは、子どもたちの想像力を刺激する。たとえ音楽が苦手な子どもでも、自分の得意分野から表現を考えるきっかけをつくることができる。

また、この活動時に用いている絵画の素材は、具象的なものではなく抽象的なものが利用されている点が特徴的である。このように抽象的な絵を利用することによって、子どもたちの想像の幅が固定化することなく、自由に拡大する効果が挙げられ、有効な手段と考

えられる。

また具体例では、身体の動きを伴った音楽表現の活動が提案されている。指導書には、「虹」についてイメージする音や音楽について身振りなどの身体表現を加えて表現する活動が記されている。音を発しないフォルムから音楽表現を考える活動もみられ、アプローチの多様性が感じられる。さらに具体例では、詩や写真から音楽表現を考える活動も見られ、音楽イメージを他分野の芸術活動を一助として展開させていることがわかった。スイス出身の画家や国名（Confederation Helvetica）も教材に取り入れており、自国の素材を積極的に活用していることにも気づかされる内容であった。

④日本の小学校における適用の可能性に関する検証

スイス・フランス語圏の小学校で行われている総合的なアプローチによる音楽学習を基に試行した「『水』を音楽で表現しよう」の実践授業を基に、音楽科と他教科との連携が子どもたちの音楽表現力を深めるために有効であるかを検討した。

本授業では、国語科の擬音・擬態語、図画工作科の絵画と関連した授業を行った。授業では、音・音楽から受けるイメージをオノマトペや絵で表現した。次に、その絵から聞こえてくる音をオノマトペで表現し、さらにその絵からイメージする音や音楽を表現する学習を行った。具体的な活動内容と子どもたちの反応については、以下に示す。

子どもたちは、オノマトペで音を表現することで、言葉のリズムのおもしろさと音楽性との関連を感じていた。このことによって、子どもたちは、音を自ら表現するきっかけを掴み、音を創ることへの意欲を育むことができた。

次に鑑賞した音楽からイメージする風景を絵に表現すること、さらにその絵から聞こえてくる音や音楽を表現する学習を行った。ここでは、自分が描いた絵ということから、イメージが具体的にになり、どのような音が聞こえてくるか、またイメージする音楽はどのようなものかということがすんなりと子どもたちの中から言葉として出てきていた。そして、絵のイメージを、音や音楽に表現する活動も、子どもたちの中に具体的なイメージが築かれているせいか、素材探しの活動へ速やかに移行していった姿が印象的である。より自分のイメージにあった素材を探しだし、音のだし方の工夫や構成を考えている子どもたちの姿は、音楽づくりを楽しみながら、自己を積極的に外へ表現しようとしているように感じられた。このように総合的なアプローチをすることによって、自己のイメージが具体化し、表現に役立っていることがわかっ

た。

音楽科と国語科，図画工作科が関連することによって，音楽科では子どもたちの表現に深まりが見られた。表現活動に多角的にアプローチすることによって，表現したい自分の思いが具体的になり，音楽表現の深まりへと繋がっていったことが認められた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

①今 由佳里，「スイスの学校音楽教育－聴取と評論能力育成に着目して－」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』 Vol. 64, pp. 69-76 (2013). 査読無

②今 由佳里，「音楽表現力を育むための総合的アプローチに関する一考察－『「水」を音楽で表現しよう』の授業分析を通して－」『研究論文集－教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集』 Vol. 6, No. 1, pp. 1-13 (2012). 査読有

③今 由佳里，「スイス・フランス語圏の小学校における音楽表現力育成に関する一考察－PERCEPTION - CREATION - EXPRESSIONの活動に焦点をあてて－」『関西楽理研究』 Vol. 29, pp. 163-170 (2012). 査読有

④今 由佳里，長谷川理子，「ジュネーヴ州の公立小学校における音楽教育」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』 Vol. 22, pp. 11-18 (2012). 査読無

〔学会発表〕(計3件)

① Yukari KON, The Effect of Musical Expression with physical Movements at Japanese Elementary School, 30th ISME (International Society for Music Education) World Conference, 2012年7月17日 (Thessaloniki, ギリシャ). 審査有

②今 由佳里，音楽表現力を育むための総合的アプローチに関する研究－”LA MUSIQUE A L'ECOLE”の内容分析を通して－，日本音楽表現学会第10回大会，2012年6月23日 (於：山梨大学)

③今 由佳里，スイス・フランス語圏の学校音楽教育 その1－聴取能力と評論の精神の育成に着目して－，日本音楽教育学会第42回大会，2011年10月22日 (於：奈良教育大学)

〔図書〕(計1件)

今 由佳里，『音楽表現力を育むための総合的アプローチに関する実践的研究 スイスの教育からの示唆』平成23～24年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書，全76頁 (2013)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今 由佳里 (KON YUKARI)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：40440838